

---

# 可愛いうさぎちゃん

泉夏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

可愛いうさぎちゃん

### 【Nコード】

N6265Y

### 【作者名】

泉夏

### 【あらすじ】

異世界にやってきたうさぎちゃんと飼い主のお話。

私の朝は早い。

まず自分の身支度をすませ、軽く朝ご飯を食べる。

次にお仕える主の用意。

ゆっくり寝ていればいいものを、妙に早起きだから困る。

「うさぎ、なにをぐずぐずしているんです。さっさと準備なさい。」

「はい、申し訳ございません！！すぐに参ります！！」

ああ、今日はもう起きてるよ。

しかも機嫌が悪いらしい。

やだなあ、八つ当たりされたら。

ここはブランミュール王国。

そう、日本ではない。

もつという地球でもない。

何故こうなったかさっぱりわからない。

ちなみに私は“うさぎ”ではなく人間だし、そついう名前でもない。  
ではどうしてそう呼ばれているかというところ…

真っ白で長いふかふか耳。

お尻にも真っ白なふわふわしっぽ。

ただしこれは本物ではない。

人間なのだから当たり前だ。

所謂バニーガールという恰好である。



私の名前は佐伯結依、25歳。

しがない派遣社員だった。

給料なんて微々たるものだったので、夜のお仕事もしていた。

その仕事着がコレである。

バニーガールの恰好をした女の子がお客様と楽しくお酒を飲みながらお話しする。

お触りはなし、ということになっていたが、そこは・・・ねえ。

まあ、私はそんな輩にはかるーく制裁を加えていたが。

あの日は休憩中にふとゴミ袋が目についたため、ちよつと外まで捨てに行こうかと思っただけだ。

ちよつと外の空気も吸いたかったし、ついだとばかりに。

何がいけなかったの？ねえ、神様よお。

少し重いゴミ袋を一旦床に置き、ドアを開ける。

外にある重石でドアを固定しておこうと外に出た、が、あら？  
あらら？

目の前は薄暗い路地裏ではなく、木で緑がいつぱいだ。

ピンヒールのかかかが気持ち埋まっている気がするのは気のせいではないようだ。

だってコンクリートではなく、土。

「え。」

自分の目を疑って、とりあえず後ろを振り返ってみたが、そこにはあるはずのドアがなかった。

「・・・。」

私はしばらく呆然としていたと思う。

なにがなんだかわからない。

しかもこんな恰好だし。

周りを見渡すが、木、木、木。

森？いや、森に行ったことがないからわかんないけど。とりあえず、どこかに続く道はあるようだ。

現に私がいる場所もちょうどその道の上。

これが本当に木々の中に放り出されていたら大変だったろう。

さて、このままここにずっといるわけにはいかないのだが・・・。

「右に進むか左に進むか、だよな。」

これってけっこう重要な気がする。

残念なことに都合よく看板が立っているわけでもない。

「うーん。ここはアレを使うべき？」

端によつて小枝を拾い、地面に垂直になるように指で先を支える。

指を離して倒れた方に進むというアレである。

「でもこれ道じゃない方に倒れちゃったらダメだよな。」

危惧した通り、中々思う二方向に倒れてくれない。

そんな傍から見たらくだらないことを夢中でやっていたため、近づいた気配に気付かなかった。

相当キテたんだと思う、私。

「何をしているのです。」

「わあっ！！！」

突然後ろから声をかけられ非常に驚いた。

ビクーっ と体を震わせると、不安定な体勢でしゃがんでいたため、尻餅をついてしまった。

しかもお尻には尻尾が付いていて、変に厚みがあり余計に痛かった。

「ったあー。」

「おや、大丈夫ですか。それにしても色気がないですね。きゃーとか言えないのですか。」

きゃーなんて言えるか、つーか本気でびびったら可愛げのある声なんて出ないと思う。

「もっ、なに？」

体勢を崩したまま仰け反つてみると、男が立っていた。

「何をしているのかと聞いたのですよ、うさぎさん。」

「は。」

本日二度目の呆然。

どう見ても日本人ではないし、容姿も恰好も変だ。

いや、私も恰好は変だがそれはこの際措いておく。

銀の長髪に紫の瞳。

黒いロープ？マント？から覗く服は白のゆったりとしたワンピース？

それはそれは綺麗は男だった。

これは一体……。

「困ったうさぎですね。」

そのままの体勢で動かなくなった私に呆れると、ふわりと持ち上げて立たせようとした。

「え、あ。す、すみません。」

が、ヒールでよろめいてしまい、後ろにいる男に寄り掛かってしま  
う。

「どうやらこの耳は偽りのようですね。ということはこの尻尾も。」

「え、当然でしょ、おっ!？」

「うん、肌触りがあまりよくない。」

私の頭に付いている耳をふにふにと触っていたかと思うと、正面を  
向かされ、尻尾を含むお尻を撫で始めた。

なにこの人ー!!

抵抗して放れようとするが、腕をがっちり回され身動きがとれない。

「ちよつと！やだ放して!!」

男女の力の差か、びくともしない。

無駄が嫌いな私は早々に諦め、大きなため息を吐く。

落ち着け、なんだか怪しいが人に会えた。

とりあえずこの人に頼るべきだ・・・よね？  
会社や店のいやーなおっさんに比べたら全然ましじゃないか。  
やってることはアウトだが、顔がセーフだ！  
我慢だ私！と自分に言い聞かせた。

そんな様子を見ていた男は、身を屈めたかと思うと私の本当の耳に  
そつと息を吹きかけた。

「ひゃあっ！」

思わず出た声に恥ずかしく思い、近くなった男の顔をきつと睨みつ  
ける。

すると男はにっこり笑って言った。

「出るじゃないですか、いい声が。」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6265y/>

---

可愛いうさぎちゃん

2011年11月20日18時36分発行